

TOEIC[®] Listening and Reading テスト高得点取得を目指した学習指導法 ～ TOEIC[®] L&R テストスコアアップ指導者養成講座での学び～¹

山形 俊之^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス・情報学科

【抄録】

TOEIC[®] Listening and Reading テスト（以降 TOEIC L&R テストとする）において高得点取得を目指すには、英語力、情報処理能力に加え、TOEIC 受験力の3つの力をトレーニングする必要がある。これまでの指導でもそこに重点を置いてきたつもりであったが、今回、本学の「教育改革支援事業」の一環として、学生のさらなるスコアアップにつながる指導法を学ぶため、TOEIC 指導者対象の講座を受講した。本論では「TOEIC[®] L&R テストスコアアップ指導者養成講座」で学んだ TOEIC L&R テスト指導者としての新たな見解と、効果的な学習指導法を紹介し、これまでの TOEIC 指導の見直しと、それを活用した指導事例を紹介する。

【キーワード】

TOEIC、英語教育、英語教授法

はじめに

TOEIC[®] Tests は、英語能力判定に使用されている検定試験の一つである²。特に TOEIC L&R テストは、他の英語検定試験に比べても企業で重視されていることから、多くの大学・短大・専門学校等で受験が強く推奨されている。本学においても英語学習の成果として、また英語能力判定の指針として TOEIC L&R テストを活用しており、目標スコアを 500 点に設定している。

筆者は入職以来 TOEIC L&R テストの授業を「ゼミナール」で担当してきた。しかしながら、学生のスコアをみると、一定のスコア向上（100～200 点）から先は伸び悩み、卒業に至るとい

<連絡先>

山形 俊之 yamagata@shohoku.ac.jp

状況が多く見られた。実際、筆者のゼミ生が卒業時に取得しているスコアは 350～480 点である。1 年次初めて受験した IP TOEIC L&R テストのスコアが 200～300 点であることと、本学の平均スコアが 300～330 点ということを考えれば、学生の努力は評価できるのだが、残念ながら多くの学生は本学の目標スコアを超えてはいない。また、2016 年 5 月の第 210 回公開テストからテスト形式が変更された。TOEIC を運営する IIBC（国際ビジネスコミュニケーション協会）によると難易度に変化はないとされているが、より実用性とスピードが求められるようになった。それに伴って、ゼミ生からも「全問解くことができない」、「難しくなってる」という意見もあがった。そこで筆者自身の指導法を見直す必要性を強く感じ、平成 29 年度に新しく設置された「教育改革支援事業」に

応募し、採択されたことにより改めて勉強しなおす機会を得た。特に「TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座（株式会社アルク主催）」での学びは、筆者に新たな知見を与えてくれた。本論では、まず TOEIC L&R テストの特徴を簡単に紹介し、本学の目標ラインの意味合いについて説明する。次に、TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座（以降 TTT とする）の内容と、筆者が特に影響を受けた学びについて紹介する。そして最後に TTT での学びを活用して筆者が2018年度に実施した施策と指導法を事例として紹介する。

1. TOEIC L&R テストと本学の目標点数

本来であれば本章で TOEIC Tests 全般について詳述するべきであろうが、TOEIC の歴史・変遷について紹介されている資料は、IIBC ホームページや TOEIC に関する評論など多く見られるので、ここでは教育機関で採用される試験と TOEIC L&R テストとの比較に焦点を当て、本学が TOEIC L&R テストを採用する理由と、本学の目標スコアの設定について紹介する。

TOEIC L&R テストが多くの企業で英語運用能力判定に採用されていることは前述したが、これは他のテストと比較して TOEIC L&R テストが異なる特徴をもっているためである。表1は教育機関で受験が推奨されている主な英語関係科目の一覧である。

各検定試験の概要に記載した各検定試験のターゲットに注目してほしい。実用英語検定試験（以降、英検と略す）は「英語圏における社会生活（日常・アカデミック・ビジネス）に必要な」英語運用能力を判定することを目的としている。最も汎用性が高いテストといえるが、アカデミックとビジネスという異なる分野がひとまとめにされているので、後述する本学学生のニーズとしてはやや外れると判断せざるを得ない。ただし、英語運用能力を5級から1級までの7段階で判定し、中学校・高等学校・大学とステップアップしていく英語学習の各段階における英語能力を判定することが可能となっており、多くの学校教育機関で受験が推奨されていることは当然といえる。また、TOEFL と IELTS は、一言でいえば、「海外留学に必要な英語力を判定する」試験となっている。つまり大学などで一般的になっているこれらの試

表1 一般的な英語資格一覧

試験名	概要	目的	受験者数	年間実施回数	試験時間	成績評価	受験料	有効期間
TOEIC L&R	ビジネスパーソンが日常生活で使う英語コミュニケーションを理解・活用できるかを測定	就活、昇進、海外異動	約250万人 (世界約700万人)	10回 (日本)	L: 45~47分 R: 75分	10~990点 (LR各5~495点)	5,725円	2年 ※公式認定書 再発行可能期間
TOEIC S&W	ビジネスパーソンが日常生活で使う英語コミュニケーションを理解・活用できるかを測定	就活、昇進、海外異動	約3.2万人 (世界約700万人)	24回	S: 20分 W: 60分	0~400点 (SW各0~200点)	10,260円	2年 ※公式認定書 再発行可能期間
実用英語検定試験	英語圏における社会生活（日常・アカデミック・ビジネス）に必要な英語を理解・活用できるかを測定	大学入試、就活、留学	約339.4万人	3回	※1次試験(L,R) 1級: 100分、35分 準1級: 90分、30分 2級: 85分、25分 準2級: 75分、25分	1~5級	1級: 8,400円 準1級: 6,900円 2級: 5,800円 準2級: 5,200円	特になし ※留学に使う場合は2年
TOEFL iBT	(海外) 高等教育機関で英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測定	留学	非公表	40~45回	R: 60~80分 L: 60~90分 S: 20分 W: 50分	0~120点 RLSW各0~30点	US\$235	2年
IELTS	英語コミュニケーションが必要な場所において就学・就業するために必要な英語力を測定	留学、移住	約37,000人 (世界約300万人)	約40回 (ほぼ毎週)	L: 40分 R: 60分 W: 60分 S: 13~00~19:00	1.0~9.0 (0.5刻み)	25,380円	2年
TEAP	日本における大学教育レベルにふさわしい英語力を測定 (EFL環境の大学で行われる授業を理解し、意見したり伝えたりできるかを評価) ※高校生向き	受験	約1.4万人	3回	L: 50分 R: 70分 W: 70分 S: 10分	80~400点 (0.5刻み)	LR: 6,000円 RLSW: 15,000円	2年

験は、国内外の高等教育機関で英語のみを使用言語とした教育に耐えうるだけの英語力、または海外で生活するのに必要十分な英語力を習得しているかを判定する試験といってよいだろう。さらにこれらの試験は上級になるにつれて理解すべき英単語・表現が専門性を帯びてくる。日常生活に係る英語表現のみならず、生物学や天文学、ロボット工学など、広範囲の知識を必要とする。そのため検定試験の勉強をすることが同時にこれらの専門的な知識を学ぶ場ともなっている点で、ニーズの合う受験者にとっては一石二鳥の検定試験といえる。しかしながら、これらの試験も、留学を希望する学生がみられない本学にとって、ニーズはかなり低い。

これに対し、TOEIC L&R テストは「知識・教養としての英語ではなく、オフィスや日常生活における英語によるコミュニケーション能力を幅広く測定」するテストである³。また「特定の文化を知らない」と理解できない表現を排除している⁴。つまり「ビジネスパーソンが日常生活で使用する英語コミュニケーション能力」を判定するテストといっていいだろう。他のテストと異なり、高度な専門性の高い英語能力を判定するのではなく、あくまでビジネスマンの日常生活がターゲットにされていること、職種・業種による知識の偏りもないことが、多くの企業・学校で TOEIC L&R テストが採用される理由となっている。本学が TOEIC L&R テストを採用している理由もここにある。つまり、卒業後に大多数の学生が就職することを考慮すると、TOEIC L&R テストの学習内容が学生のニーズに合うためである。他の学校教育機関で TOEIC L&R テストを採用されている場合も、同様の理由からだろうと推察される。

また TOEIC L&R テストは、英語を母国語とし

ない全ての人を対象としていることから、世界約 160 か国で受験可能となっており、結果的に受験者も他のテストに比較して非常に多いのも特徴の一つだろう。ちなみに 2017 年度、日本国内では約 250 万人が受験しており、海外の受験者数をあわせると約 700 万人が受験している⁵。また日本国内での試験会場は全国 80 都市にあり、受験回数も公開テストは年間 10 回を数え、受験しやすい環境も整っているといえる⁶。本学では受験日程などを調整できる IP TOEIC (団体受験) を年 3 回実施しており、2017 年度には延べ 182 名 (全学生の 20% 程度) の学生が受験している。実施月は 6 月、9 月、1 月である。このうち 9 月と 1 月については、それぞれ 2 週間の短期海外研修、3 ヶ月留学の成果測定の意味合いを持たせている⁷。

このように TOEIC L&R テストにはポジティブな特徴がある一方で、たびたび批判にさらされてきた。少し脱線になるが、この点に関して、簡単に筆者の考えを述べておきたい。猪浦道夫は TOEIC L&R テストを分析して次のように批判している⁸。

テスト内容を分析してみると、学問的な内容、抽象的な議論、政治経済に関する内容のものは出題されない。また、遊びに関する話題も避けられていて、日常のルーティン・ワークに関する内容で終始する。

つまり一部の方しか知らない専門用語が出てくる会話、また逆にスラング (俗語) や崩れた発音や方言の濃い文章は扱われぬ。問題文は標準的で、ややゆっくり明瞭に発音されている。

もう一つの特徴は、試験時間に比して問題数が多いことからわかるように、じっくり考えるタイプの問題は出ないということだ。したがって、文章をきっちり分析して読む力ではなく、即時対応する瞬発力のようなものが重要視

されているわけだ。(アンダーラインは筆者による。)

この分析的批判はあながち間違っていない。前半部の内容について、TOEIC テストでは宗教や犯罪・事故なども避けられていることは有名なことである。しかし、このような専門性の高い内容や特殊な事情は、前述したように、そもそも TOEIC テストで測定しようとする対象ではないわけである。そして下線部については、筆者はこれこそ TOEIC の特殊性と考えているが、TOEIC L&R テストが、ビジネスの現場に必要な能力を測っていることを逆に明確にしていると思われる。実際の現場で Email を受信したら、とにかくまず何らかの返信をするのが一般的であろう。海外からのメールだからといって、会社が休日でない限り、翌日以降に返信するということは信用を無くす行為といえる。社内文書でもメモでも短時間で内容を確認して対応する。現実世界ならその中に専門用語が含まれるかもしれないが、その書式や文書構成については特異な点はないだろう。さらに言えば、ビジネス文書の中で文学的な表現や凝った引用などを多用するビジネスマンがどれだけ存在するだろうか。そのような常に行間を読まなければならないビジネス文書を毎回のようを送り付けられる方は迷惑ではなからうか。したがって、ビジネスパーソンが日常生活で受け取る文書で、長考しなければ読めないような状況というのも考えにくいわけである。もちろんそれを読んだ後の対応は熟考するだろうが、内容理解は速読の領域になるだろう。リスニングについても同じことが言える。ラジオや各施設での放送、プレゼンテーションなどから情報を拾うのは1回のチャンスしかない。会話の際も、相手が述べたことを理解し、返答することを繰り返されるわけである。したがって、理解の瞬発力と、早く正確に

情報を読み取る(または聞き取る)スキルを測るという点で、TOEIC テストはビジネスパーソン(になろうとする人)に向けたテストとして適切なものと筆者は考えている。

他にも様々な批判があるが、TOEIC L&R テストは2006年、2016年の改訂により、より実用的・実践的な内容を盛り込むことで現実的なニーズに即した見直しが行われてきた。したがって、現段階では、社会人または社会人を目指す学生向けのテストとして TOEIC L&R テストが最適ということになるであろう。もちろん今後、ビジネスパーソンにより適したテストや、特定の職種・業種に特化したテストが現れる可能性は十分にある。

話を元に戻そう。前述したように、大多数が就職を希望する本学学生のニーズに適した判定試験として本学では TOEIC L&R テストを採用している。とはいえ、本学は英語を専門とする学科はないので、TOEIC 受験については特に卒業要件になっているわけでもなく、TOEIC 受験も必須というわけではない。しかし TOEIC の対策授業を複数設定する中で、目標点数として500点というラインを設定した。次にこの点数基準について考えたい。

この500点という点数については、受験者の平均スコアから導き出したものである。IIBC は定期的に過年度の TOEIC[®] Program データをまとめ、冊子および Web サイトに掲載している。この『TOEIC[®] Program DATA & ANALYSIS 2018』を元に2017年度のデータをまとめると表2、表3のようになる。

公開テスト全受験者の平均スコアは582点(L: 320点、R: 261点)であるが、社会人および学生という分類で見ると、社会人平均が607点(L: 333点、R: 274点; 受験者数399,738名)であるのに対し、学生平均は559点(L: 309点、R: 250点; 受験者数430,476名)となっている。学校区

表 2 2017 年度公開テストデータ

分類	受験者数	平均スコア	Listening 平均	Reading 平均
全体	961,440 名	582 点	320 点	261 点
社会人	399,738 名	607 点	333 点	274 点
学生	430,476 名	559 点	309 点	250 点
4 年制大学	320,249 名	565 点	311 点	255 点
短期大学	6,316 名	473 点	279 点	194 点
専門学校	11,200 名	496 点	294 点	202 点

表 3 2017 年度 IP テストデータ

分類	受験者数	平均スコア	Listening 平均	Reading 平均
全体	1,289,311 名	467 点	262 点	205 点
企業・団体	627,363 名	493 点	274 点	220 点
学生	661,948 名	443 点	251 点	191 点
4 年制大学	440,533 名	449 点	253 点	196 点
短期大学	8,056 名	411 点	249 点	162 点
専門学校	19,445 名	467 点	282 点	185 点

分による内訳は、4 年制大学生 565 点、短期大学生 473 点、専門学校生 496 点と短大生の平均が低いが、受験人数を見ると、4 年制大学生 320,249 名に対し短大生は 6,316 名にとどまる⁹⁾。これは、わざわざ公開テストを受験する短大生が非常に少ないことを明確に示している。次に、本学でも実施している IP TOEIC L&R テストのテストデータを見てみよう。

IP テストは団体テストなので、受験者数が公開テストに比して多い傾向にあるが、平均スコアは低い。これは、IP テストが多かれ少なかれ受験を強制される性格のものだからであろう。一方で、公開テストは、受験者が自らの意志で受験するため、必然的に受験者の学習モチベーションも高く、これにともなって平均点も高くなると考えられる。また、各年の新入社員及び内定者のスコアについてもテストデータが発表されている。それによると、2017 年の新入社員 35,540 名のスコア平均は 485 点 (L: 262 点, R: 222 点) である¹⁰⁾。そして内定者 12,540 名のスコア平均は 539 点 (L: 295, R: 244 点) である¹¹⁾。

これらのデータから、短期大生としては 450 ～

480 点のスコアを取得していれば平均的といえるが、やはり社会人を目指す短大生として目標にするべき得点は 500 点以上ということになるだろう。このことから、本学ではまず初級者としては 400 点というラインを、そして最終的には 500 点以上取得する学生数を向上させることを目標としてカリキュラムが設定されている¹²⁾。しかしながら、本学の 2017 年度に IP テストを受験した延べ 182 名の平均点は 329 点 (L: 212 点, R: 117 点) とまだまだそのラインに届いてはいない。そこで、受験者数の向上と平均点向上、および目標である 500 点以上取得学生数を向上という 3 点が今後の大きな課題になる。

2. TTT での学び

前述のように、筆者は本学に赴任して以来、総合ビジネス・情報学科の専門科目「ゼミナール」で TOEIC テスト対策を教えてきた。ゼミ学生の卒業時の平均点は 2009 年度から統計を取っているが、300 ～ 450 点と幅広く、500 点というラインを超える学生数については、もともとある程度

の英語力を持っている学生に限られていたことは否めない¹³。はじめての TOEIC で 200 点台後半から 300 点であった学生で卒業時にそのラインにたどり着いた学生は数名に過ぎない。資格取得に関しては個人的な努力による部分が大きいにしても、もっと効果的な学習につなげる指導法はないか模索しているところに、TTT 参加の機会を得た。本章では TTT の内容と特に筆者にとって大きな学びにつながった点を紹介したい。

2-1 TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座

はじめに TTT について簡単に紹介したい。筆者が参加したのは 2018 年開催の第 15 回目の TTT である。概要については表 4 の通りである¹⁴。

表 4 第 15 回 TTT 講座概要

開催日時	1 日目 2 月 17 日 (土) 10 : 00 ~ 17 : 30 2 日目 2 月 18 日 (日) 9 : 30 ~ 17 : 00 3 日目 3 月 3 日 (土) 10 : 00 ~ 17 : 30 4 日目 3 月 4 日 (日) 9 : 30 ~ 17 : 00
定 員	40 名
講 師	ロバート・ヒルキ (TOEIC® 指導者養成 トレーナー／企業研修トレーナー) ヒロ前田 (TOEIC® 研修トレーナー)
使用言語	英語・日本語
参加資格	1 : 職業として、現在 TOEIC® L&R テスト または英語の指導をしていること 2 : TOEIC® L&R テストスコア「930 点 以上」を取得していること (過去 2 年 以内) 3 : 4 日間すべての日程に参加できること
教 材	『[完全改訂版] TOEIC テスト直前の技術』 『TOEIC テスト新形式問題やり込みドリル』

表 4 の情報に補足を加えると、まず 2 日目と 3 日目の間には 2 週間の課題作成期間がある。ここでは、筆者にとっての大変大きな学びの一つであるアイテムライティングが宿題として課される。これについては後述するが、各自作成した問題に関して、後半の日程でディスカッションが行われ

る。次に定員は 40 名だが、その中には筆者のような初参加の先生方だけでなく、TTT 修了生も含まれており、修了生は生徒兼アドバイザーということでグループワークでは中心的な役割を果たす。この割合は、たいていの場合、初参加者と修了生がそれぞれ 50% なのだが、第 15 回については初参加者が 2/3 を占めていた。講師は前田、ヒルキ両名が担当するが、総合アドバイザー的な役割で、同じく修了生の早川幸治が参加していた。修了生は TOEIC 講師としても経験豊富で高い実績を出しておられる方ばかりだったので、修了生の意見は大変参考になった。使用言語についてはヒルキが英語を、前田が主に日本語を使用しており、全体的には英語が 7 割で日本語が 3 割といった割合だったように思われる。また、2 日目と 3 日目には模擬授業もあり、そのための準備が宿題となる。

4 日間のスケジュールについては表 5 の通り。4 日間という短い期間ではあったが、内容が非常に充実していることに加え、多くの先生方と意見交換をする時間が設けられており、どのセッションも示唆に富む内容であった。

2-2 TTT での学び～これまでの指導の失敗を振り返って～

4 日間のスケジュールで、筆者は非常に多くの事柄を学ぶことができた。その中には、模擬授業を通じて学んだ指導法や、後述する TOEIC の問題作成スキルなど、新たに学んだことも多くある。一方で、講座の中には教員として周知の事柄であるが、授業の中でおろそかにしていたこともあった。例えば、学生の氏名を覚えることである。15 回の授業に慣れてしまっているためか、筆者は最初の 4 ~ 5 回の授業を通じて学生の顔と名前を一致させるようにしてきた。しかし講師陣は 1 回の授業の最初の数十分で顔と名前を一致させるとい

表5 第15回 TTT スケジュール

Day 1	Day 2
<ul style="list-style-type: none"> ・ TOEIC の基本情報 ・ ティーチングスタイル ・ TOEIC 指導者に求められること～生徒が何を望んでいるか～ ・ パート別出題傾向と指導法① ～ Part 2, 5, 6, 1～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬授業① ・ パート別出題傾向と指導法② ～ Part 3, 4, 7～ ・ 問題作成について
Day 3	Day 4
<ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬授業② ・ クラスルームマネジメント ・ フィジカルトレーニング ・ ディスカッション① 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問題作成課題のフィードバックとディスカッション ・ 英語指導と TOEIC 指導について ・ 英語学習法

う。このような、講座で学んだ詳細な内容をすべて紹介したいが、紙面の都合もあるので、ここでは4日間の講座の中で筆者にとって「これからの指導」に直結する学びに焦点を絞って紹介したい。この学びの中核を一言でいうならば「英語教師と TOEIC 指導者の違い」ということになるだろう。

2-2-1 TOEIC 指導者が受講者に与えるもの

TTT には2つの事前学習が課されている。それは①『TOEIC テスト直前の技術』を読み各パートのストラテジーを確認しておくことと、②前田による5本の音声講義を聞いておくことであった。この②は第1日目の講義の内容と重なるのだが、その中で、「TOEIC 対策を教える必要があるか」というテーマで、「TOEIC 指導者が生徒に与えなければならないこと」について次のように述べられていた。「スコアアップを期待して受講している生徒に与えなければならないものはスコアである。」これは至極当然のことであるが、筆者は教員として、学生に「成績につながるだけのスコアの向上」を与えてきたように思う。これまで1年半授業を受けて全くスコアの向上しない学生はいなかった。むしろ100点～200点の向上を見

せ、それに見合う成績を得て卒業していった。しかしそのスコアが「学生が望むスコアだったか」というと、大半がそうではなかった。「資格取得は個人的な努力が大切」という思い込みに筆者もとらわれ過ぎていたように思う。週一回の授業で教えたことを、問題集を自習することで定着させ、スコア向上につなげるというプロセスを盲信してしまったのである。しかし、TTT で学んだことにより、TOEIC 指導は「英語教育」であるとともに「サービス業」と同じ側面があるということがわかった。つまり、受講者が望んでいるスコア(目標点)を与え、受講者の「(顧客)満足」につなげることを考えなければならないということである。

筆者はこれまで、英語教員として学生の「英語力」を向上させることと「TOEIC スコアアップ」を同列に考えていた。しかしながら、これまでの指導からも「英語力向上＝スコア向上」という図式には必ずしもならなかった。これは筆者が「テスト対策」について誤解していたためである。ここでは TOEIC スコアアップに必要な「テスト対策」について考えたい。まず筆者の誤解と失敗を紹介する。筆者がこれまで学生に教えてきたことは「なるべく多くの問題を正答すること」だったように思う。そしてその際の「多くの」とは「なるべく全問」を意味していた。もちろん900点以上を目指すなら、なるべく全問正答を目指すことはある程度必要となるであろう。しかし500点を目指す学生に対して同じ考え方で成果が出るだろうか。答えは「否」だった。なぜ筆者がこの考えに固執してしまったかといえば、「なるべく多くの問題に正答できるだけの英語力を鍛えれば、おのずと目標点にたどり着けるだろう」と考えたからである。今考えれば、検定対策としては非常にお粗末な考え方だったと反省している。何が失敗だったのか。それは学生に「ここまで学ばせれば、

高得点につながるだろう」と筆者（指導者）が考えることを教えてしまったことである。換言すれば、学生の英語力の差をあまり考慮せず、画一的に英語力向上を目指した指導をしていたのである。指導者として筆者がすべきであったことは、ゼミ生のアベレージを高めることではない。個々の学生が望むスコアに到達させることであったはずなのに、このアベレージを基準にして学習成果を判断し、それで成績向上が見られることで良しとしてしまったのである。ここでも筆者は英語教師としてしか機能していなかったことになる。

この改善点は、学生の needs（必要性）と wants（欲求）をよく理解して、それぞれに適した指導をすることである。つまり「指導者が学習させたいこと」を指導するのではなく、「学習者が目標スコアを取得するために必要なことを学ばせる」指導こそ重要だったのである。ここで必要なのが英語力だけではなく TOEIC 受験力の向上（TOEIC 対策）ということになる。TTT で学んだ内容から、TOEIC L&R テスト対策として伸ばすべき力は3点あることがわかった。①英語力、② TOEIC 受験力、③情報処理能力である。この3点を向上させないと、なかなか高得点取得につながらない。この中で①と③は理解しやすい。つまり①は語彙や英文法の知識、英文読解などがこれにあたる。③はリスニング内容や英文についてある程度の制限（速さなど）の中でも正確に理解する力である。換言すればこれは前述した理解の瞬発力ということになるだろう。そして②だが、これは「目標のスコアを獲得するために、正答すべき問題を確実に解く力」といえるだろう。言い換えると「目標スコア獲得に必要なではない問題を的確に切り捨てる力」といってもよい。実はこの点については、筆者はこれまで一切考えていなかった。例えば、ターゲットが600点の学生を仮定してみよう。64%の正答率で600点を取得でき

るとするならば、36%の問題は不正解でも問題はないということになる。したがって、36%に含まれる問題を見抜いてパスことができ、その時間を64%の正答すべき問題に充てることができれば、この学生は600点というターゲットに到達しやすいということになる。TOEIC L&R テストは約2時間という限られた時間で200問の問題を解かねばならず、全問（100%）解答しようとするならば、1問20秒、1問60秒などの高いハードルが課せられる。しかし上記の例でいうならば36%を割愛することで、正答すべき問題にやや時間をかけて、的確に解答することも可能になる。テスト対策として「やらない問題を教える」という発想は筆者にとっては非常に斬新だった。このような「対策」をするか否かについては、繰り返しになるが、学生の needs と wants を見極める必要があるが、必要なら大いにやるべきであると筆者は考える。それは、受講者の達成感と満足に直結するものは、前田が述べたように「スコア」だからである。

このように、英語教員として教えるべきことと、TOEIC スコアアップ指導者として教えるべきことにはやや異なることがわかった。そして、筆者が最も重要視すべきは、学生全体のアベレージの向上よりも、「個々の学生が望むスコア」を確実に提供することである。筆者がそのためのストラテジーを効果的に指導でき、学生が望むスコアを取得できれば、学生の成果に対する満足度とともに、さらに上のステップに進むモチベーション向上にもつながるだろう。

2-2-2 TOEIC L&R テストについて知る

TOEIC L&R テストを教えている教員の多くは、年間定期的に TOEIC L&R テストを受講していると推察されるが、恥ずかしながら筆者もそれほど多くの回数を受験しているわけではな

かった。TOEIC テストが改訂されたことを受け、2007 年に受験し、その後は 2 度目の改訂になった 2016 年 7 月まで受講してこなかった。この 2 回の受験の動機は、自身のスコアアップもあるが、なによりも改訂されたテストを自分自身で確認したかったことがある。受験者という立場ならこれでいいのかもしれない。しかし、指導者という立場で TOEIC L&R テストを受験する意味についてあまり考えてはこなかった。今回 TTT で出会った多くの先生は年間 10 回実施されるテストをできる限りすべて受験していた。その意味合いは非常にシンプルで、「TOEIC を教えるならば TOEIC を知らなければならない」ということである。

ここでは「TOEIC を知る」意味について考えたい。TOEIC テストは米国の ETS (Educational Testing Service) が作成していることは周知の事実だが、そのテスト内容、評価方法、スコアと正答数の関係については一切公開されていない。したがって、その非公開の情報を得る場合は実際のテストしかないわけである。実際のテスト内容を授業に盛り込むことは、受講者との信頼関係に大きく影響する。一般的なテキストを使用すれば問題パターンと対策を網羅的に教えることができるが、その内容だけを教えている講師と、それに加えて最新のテストの動向を自らの経験として教えることができる講師では、受講者の講師への信頼度が異なることは明らかである。TOEIC L&R テストを受験しているからこそわかる情報を受講者に与えることは、受講者の学習モチベーション向上にもつながる。実際に出題された問題パターンをテキストで学習した情報に加えることで、学習内容が具体性を帯びるためである。

テキスト選択の上でも TOEIC L&R テスト受験経験が非常に有効になってくる。繰り返しになるが、TOEIC L&R テストは非公開であるため、世間で出版されている、いわゆる TOEIC 対策問題

集で、過去に出題された問題を扱っている書籍はない。ETS の刊行する『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集』でさえ「予想問題」に過ぎない。したがって、実際の TOEIC L&R テストを受験し、問題の性質をとらえていないと、数多ある問題集の中で適切なテキストを選択できないことになる。それを見抜く目も TOEIC 指導者としては養わねばならない。また、このように多くの対策問題集の中から受講者に最も適したものを提示できることも、指導者としての信頼につながることは言うまでもない。

この「TOEIC を知る」という点について今回 TTT で学んだ効果的な学習がアイテムライティング、つまり問題作成である。これが 2 日目と 3 日目の間に課される課題なのだが、思いのほか難しかった。筆者は Part 3 と Part 5 を担当した。Part 3 では 2 人の会話が与えられており、その会話から意図問題を含む 3 問を作成する課題、そして Part 5 では読むことで解答につながる問題の作成であった¹⁵。共通して時間がかかったのは選択肢である。これまでに一般的な英語のテストづくりについては研究したこともあったので、多少は自信があったつもりだったが、そのセオリーで作った問題は、どこか TOEIC L&R テストらしからぬものであった。それを TOEIC L&R テストらしくするために、問題集を見直し、何度も修正を重ねて仕上げた。しかしながら、4 日目のグループディスカッションにおいて、数問の選択肢に対して、「TOEIC ではこの選択肢は使わないですね。」という指摘をいただいた。それらはいわゆる「ひっかけ問題」であった。そして「TOEIC の不正解は著しく不正解。不正解の選択肢の中に、ひっかけの選択肢があるのは不自然。」と教えられて気付いたことは、ここでも筆者は英語教師として問題を判断していたことであった。TOEIC らしい問題、TOEIC らしからぬ問題の区別が筆

者にはできていなかった。ここでのトレーニングにより、筆者がいかに TOEIC を知らないかを思い知らされた。

「TOEICを知る」ことは、TOEIC L&R テストを受験するだけでなく、様々な問題集の研究を含むことになるが、これはもちろん学生の目標スコアを与えることにつながる。しかしもう一つの側面として、学生との人間的な信頼を獲得し、学習モチベーションを向上させることにつながる非常に有効な手段でもあることが、実践的に理解することができた。特にアイテムライティングのスキルは今後さらに磨いて授業の中で活用できるようにしたい。

2-2-3 TOEIC スコアアップ指導

本項の最後に、スコアアップのためのフォローアップ指導について TTT で学んだことを紹介したい。まず本題に入る前に、TOEIC L&R テストのテスト結果について触れたい。

IIBC ホームページ内に掲載されている TOEIC L&R テストの「結果について」を見ると、「テスト結果は合格・不合格ではなく、リスニング5～495点、リーディング5～495点、トータル10～990点のスコアで5点刻みで表示されます。このスコアは正答数そのままの素点 (Raw Score) ではなく、スコアの同一化 (Equating) と呼ばれる統計処理によって算出された換算点 (Scaled Score) です」とある¹⁶。つまり、TOEIC L&R テストのスコアは1問5点という絶対評価ではなく、相対評価ということである。これはテストの難易度によるスコアの差が出ないように行われている処理である。例えば、仮に英語力が同程度の A 氏と B 氏が異なるテストを受験したときに、難易度の低いテストを受験した A 氏の正答数が上がり、やや難易度の高いテストを受けた B 氏の正答数が下がってしまったとしよう。ここで正答数＝

スコアだとすると A 氏は B 氏より高いスコアを取得することになる。テストが異なれば、難易度が全く同じということはあるにないわけだが、それが直接スコアに反映されてしまっただけでは正当に英語力が測定されたとは言えない。そこでこの統計的処理によって、テストの難易度による影響をなるべく最小限にしているわけである。つまり英語力が同程度の両氏が異なるテストを受けたとしてもスコアに大きな違いは見られないようになっていることになる¹⁷。

もう一点、よく学生から「公開テストと IP テストのどちらを受けたらいいですか」という質問を受けるので、ここで公開テストと IP テストの違いについて簡単に触れたい。違いはいくつかあるのだが、スコアアップ指導に直接かかわる違いのみを紹介すると、①公開テストは ETS が毎回新たに作成しているテストであるのに対し、IP TOEIC は過去に実施された公開テストから問題を作成していること¹⁸、そして②テスト結果のフォームが異なることが挙げられる。

この質問を受けた場合、筆者は「どちらを受けてもよい」という指導をしている。①の違いがあるにしても、そもそも問題もその正答も非公開である以上、過去の数千問を記憶し復習していない限り、正解がわかるわけではない。したがって、学生には IP テストを受験することを勧め、経済的に余裕があるのなら「公開テストも受けてみたらどうか」という程度にとどめている。

②については図1を参照されたい¹⁹。図に示した2枚はまず名称が異なる。IP テストの結果は“TOEIC Listening & Reading Institutional Program (IP) Score Report” (個人成績表)、公開テストは“TOEIC Listening & Reading Official Score Certificate” (公式認定証) と呼ばれている。「公式」と付されないから IP テストが格下というわけではない。図1から明らかな違いといえば、公



図2 公式認定証の記載内容

つまり、リスニングスコア 300 点を取得した受験者は上位 59% に位置することになります²¹。(カッコ内筆者) 付記した「ある母集団」については公式認定証に記載があり、受験年度によって異なる。2018 年度の場合、「2015 年 1 月から 2017 年 12 月にかけて世界中で実施した TOEIC Listening & Reading 公開テストの全受験者です」となっており、受験年度より以前 3 年間の受験者を母数として取得スコアの相対的な位置を示している。

筆者はこれまで、フィードバックとして B を参考にしてきた。つまりリスニングスコアとリーディングスコアを参考に「リスニングスコアが上がったね。今回は頑張ったね」、または「リーディングのスコアが下がったから、単語のトレーニン

グをやって、読むトレーニングを増やそう」というような指導を行ってきた。学生各自が受験した TOEIC L&R テストについてはリスニング・リーディング・トータルのスコアを記録してあるので、それを元にすれば、これまでのスコアとの比較は可能である。しかし 7 つある TOEIC L&R テストのどの部分を勉強すればいいか、なぜ今回その点数になってしまったのかという分析的な説明もアドバイスも一切できなかった。その理由は、筆者が AM を活用することができなかったからである。

AM は各セクションで 5 つずつ、合計 10 個の項目における正答率を示している。その項目は以下の通りである (L はリスニング、R はリーディングを示し、番号は項目を示す²²)。

【Abilities Measured】

Listening

L1	短い会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる
L2	長めの会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる
L3	短い会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる
L4	長めの会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる
L5	フレーズや文から話し手の目的や暗示されている意味が理解できる

Reading

R1	文書の中の情報をもとに推測できる
R2	文書の中の具体的な情報を見つけて理解できる
R3	ひとつの文書の中でまたは複数の文書間でちりばめられた情報を関連付けることができる
R4	語彙が理解できる
R5	文法が理解できる

このように、各項目の正答率によって測定され

る内容が並べられているが、どこのパートで、どのような問題に正答すれば、どの項目の正答率が向上するのかについては公表されていない。これもスコア算出法同様、非公開である。この点に関して、今回の TTT で筆者はその目安について学ぶことができた。「目安」という言葉を使用したのは、繰り返しになるが、正答率と正答数の関係については公表されておらず、テストフォームによっても当該項目に該当する問題数が異なるため、毎回「R1 に該当する問題が 00 問」というように断定することができないからである。この目安はこれまで 200 回以上実施されている TOEIC L&R テストを何度も受験し、統計的な実験をした方々の研究の産物であることを付け加えたい。

学習指導という点で、この AM を活用して指導することの最大の利点は、これまでの学習成果のフィードバックや、これからの学習法についてのアドバイスがかなり具体的になることである。また、これは学習者と指導者の信頼関係を深めること、そしてそれに起因する学習モチベーションの向上につながることは言うまでもない。例えば、授業中ある問題に遭遇した時に「この問題は AさんとBさんの苦手なタイプの問題だから、解説も使ってしっかり勉強しよう。」とか、「このタイプの問題の正答数を3問増やせばCさんはあと15点くらいスコアが上げられるよ。」というように、数字を用いて具体的に弱点や目標を示すことができれば、学習への姿勢や TOEIC への向き合い方もいい方向に変化してくる。ただし、そのためには我々指導者が「知識」としてその目安を知ることだけでは全く不十分である。TOEIC L&R テストを受験し、実際の問題に関する研究を深めることによってそのアドバイスはよりの確なものになっていく。つまり、AM 活用の根幹にあるのは「TOEIC を知る」ことなのである。

本章では筆者にとって強く影響に残った TTT

での学びについて3点紹介した。TOEIC 指導者として学習者に与えるべきもの、TOEIC を知ること、テスト結果を活用したフォローアップ指導はどれも目新しい指摘ではない。むしろ TOEIC という資格指導をする立場にあるなら当然意識しなければならなかったことだろう。しかし、筆者はこれまで「英語力」を向上させるという英語教師としての目標と、TOEIC L&R テストでのスコアアップという学習者の目標を半ば混同していたことを思い知らされた。この4日間の講座で筆者は、英語教師であるとともに TOEIC 指導者として考えるべきことを多く学ぶことができた。次章ではその活用について考えたい。

3. これからの指導と今後の展望

2018 年度は TTT で学んだことを本学で活用することに専心した。そこで本章では筆者が 2018 年度に行ってきた TOEIC 関連のイベントや講座、学習指導について紹介したい。

まず、2018 年度から新入生プレイスメントテストとして TOEIC® Bridge® テストが導入されたことにより、新入生に TOEIC というキーワードを意識させることに成功した。そこで、TOEIC L&R テスト受験に興味を持ってもらうため、6 月初旬に「TOEIC L&R テストはじめて講座 2 Days」というイントロダクションの講座を2日連続で昼休みに開催した²³。開催直前の告知だったにもかかわらず、両日ともに35名の学生が参加した。Day 1には TOEIC L&R テストがどのようなテストか、どのくらいのスコアを目標にするか、どんな参考書があるかについて紹介した。この Day 1 は 2017 年度から TOEIC 対策問題集を図書館に多く導入してもらっているので、その活用につなげる意図もあった。Day 2 には各パートの簡単な攻略法を指導したが、約40分で7つの

パートを説明するには、まだ筆者は力不足で、やや不完全燃焼でもあった。反省点は明確で、学生の目標を聞き出さなかったことである。そのため、不必要な部分まで説明してしまった。来年度は2日目の最初に各学生の目標を聞くところから始めようと考えている。また、「はじめて講座」で、概要説明と対策を両方行ったため、学生にとっては情報過多になってしまったと感じている。日程も考え直したい。しかし、そこで公式テストに興味を持ってくれた学生も多く、TOEIC L&R テストに対して学生が考えている高い壁や不安を払拭することにはつながったのではないかと思う。その結果として、6月末に実施したIP TOEIC L&R テスト受験者数が、例年約60名に対し、2018年度は79名になった。もちろん「はじめて講座」に出席した学生は全員受験した。今回は1年生を対象に実施した本講座だが、次年度は時期も5月中に実施し、2年生も対象にできればと考えている。

9月実施のIP TOEIC L&R テストの直前にも「直前講座3Days」を実施した。例年この時期の受験者数も少なく、本講座も2017年度には5名の受講者しか見られなかったが、2018年度は6月の結果から再挑戦しようとする学生が多く、30名の学生の受講希望者があった。そこで、受講段階で300点以上を取得しており、500点以上を目指す中級クラスと、200点台で400点以上を目標とする初級者クラスを設置した。中級クラスはTTT 修了生でもある渋谷奈津子先生にご担当いただき、初級者クラスは筆者が担当した。反省すべき点は、設定した日程が、試験直前の連続3日間だったので、復習をする時間を十分に取ることができなかったことである。次年度に向けては学生に復習時間を取っての開催にしたい。なお、9月のIP TOEIC L&R テスト受験者数も2017年度の39名から57名に増加した。特に渋谷先生ご担

当の中級クラスからは、本学の目標ラインでもある500点取得者が複数名出たことは特筆すべき結果であった。

TTTで学習した内容を最大限に活用してスコアアップ指導したのは、筆者のゼミ生に対してである。まず各学生の目標と現状を明確にするために、個人シートを作成した。このシートはAMを活用して、①自分の現状理解、②過去の状況との比較、③これからの学習へのアドバイスという3点を可視化した個人表になるように意識した。以下の図3と図4を両面に印刷し、1枚のシートとする。

図3には直近のTOEIC L&R テストのスコアとAM、そしてその正答率から推定した正答数および目標点数に到達するために、各項目に必要な推定正答数が記載されている。図4にはこれまでに受験したスコアの履歴、およびAMの推移をグラフとも示した。またAM正答率向上に向けたリスニングおよびリーディングの学習ポイントを記載した。

このシートを作成したことにより、①スコアの増減にどのパートが影響しているかを学生自身が確認・把握できることに加え、②AMの推移から学生の苦手なパートを割り出し、そこを集中的にトレーニングして対策を講じることが可能になった。この2点はこれまでのスコアだけを参考にしたフィードバックでは不可能であった。TTT参加前後の授業を受講してきた2年生からは「1年生の時より先生からのアドバイスがはっきりするようになったし、自分が苦手な部分もはっきりわかるから、もっと早くこのようなシートを作って欲しかった」という感想をもらうことができた。1年生のゼミではまずTOEIC L&R テスト各パートのストラテジーを全員で共有することに時間を使うが、その際にも、1回目の授業で行ったフィードバックを元に、苦手なパートの特に苦手な問題

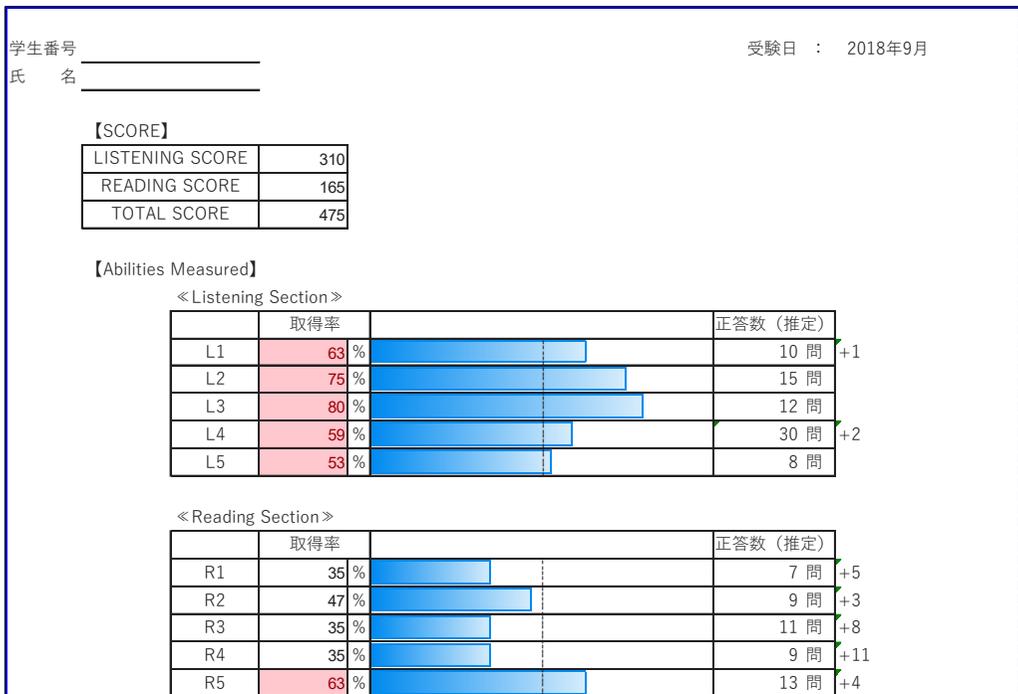


図3 個人シート (最新テスト結果)

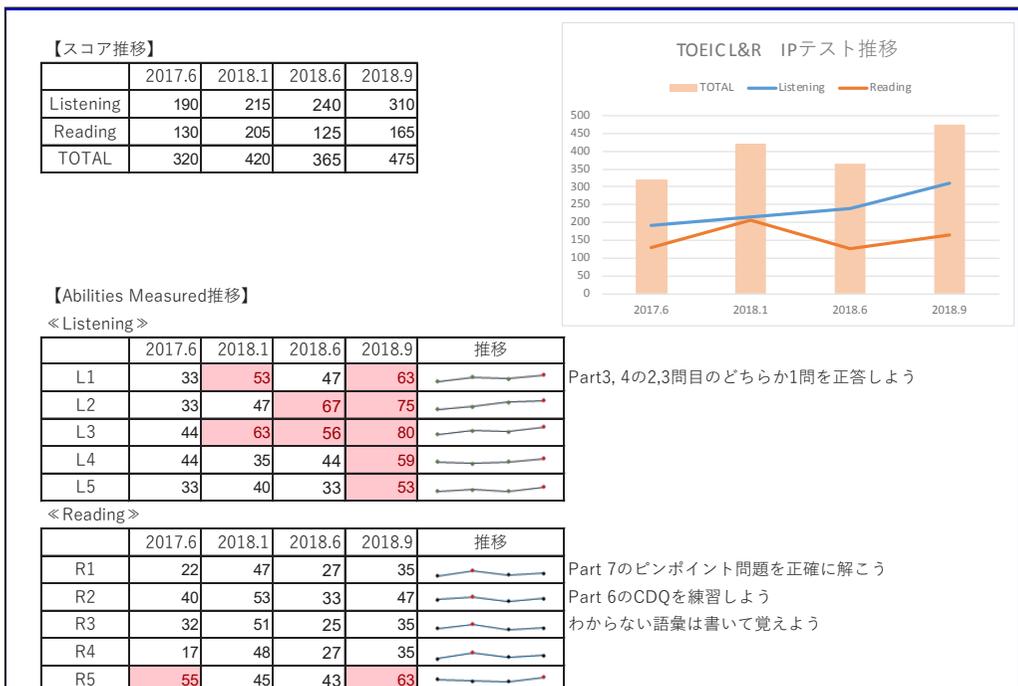


図4 個人シート (受験履歴)

に集中して復習に取り組んでもらえた。1年生のゼミでは、前田の『TOEIC L&R テスト至高の模試600問』をテキストとして使用し、正答率の低かった項目がどの程度向上したかを自学自習でも確認できるようにした。その結果、復習や自習の際に、正答できない問題を意識することができ、その問題に関するピンポイントのアドバイスを受けることで、正答率を向上させていった。残念ながら1月のIP TOEIC L&R テストの結果が本稿の締め切りに間に合わないのだが、筆者の試みがどのような結果につながるか楽しみである。

また、②の効果によって授業展開にも変化が見られたので紹介したい。これまでは原則的に一斉授業を展開してきたが、2018年度にはこのシートを元に苦手なパートが共通するグループを作り、異なるパートをグループワークの形で学習できる環境づくりに成功した。また、ただ問題を解くのではなく、グループで解答のヒントとなる部分話し合う、ゲームによってリスニングに慣れさせるなど、90分の授業の中で、多面的な授業展開を行うことが可能となった。また、TTTの模擬授業で様々な先生方からご教示いただいた手法も活用して、アクティブラーニングの要素を取り入れることを意識した。この授業展開は学生にも好評で、次年度はこれをさらに発展させたい。現在構想しているのは、学生の苦手なパートは複数にまたがっているので、25分ごとにパートチェンジを行って複数のパート対策を実践することと、各グループにそのパートがある程度得意（AM正答率70%以上）な学生を入れ、その学生がグループをけん引しながら学習できないかと考えている。2019年度の授業で実施を試みたい。

次に今後の展望についてであるが、まず、ゼミ以外のTOEIC対策授業にもアクティブラーニングを取り入れたい。通常の対策授業は選択科目ということもあり、TOEIC L&R テスト対策をテ-

マとする筆者のゼミ生に比べ、モチベーションに差が出ることが多いと考えられる。したがって、ただテキストに沿った授業をするだけでは受講者の望むスコアにつながらない恐れがある。アクティブラーニングを取り入れることにより、学生のモチベーションを上げ、目標スコア取得に向けた取り組みにつなげたい。そのためには、筆者自身が定期的にTOEIC L&R テストを受験し、常に情報をアップデートさせることで、学習に有効な情報を提供する必要がある。また、可能であれば、本学学生に最も適したレベル別教材の作成や、Moodleを使用したe-learningによるTOEIC L&R テスト学習システムの構築につなげたい。これに関しては、筆者のアイテムライティング力をもっと向上させる必要がある。これらの目標達成のために、TTTを今後も受講して指導方法についての研究を深めるとともに、修了生向けに開催されている研究会やアイテムライティングに特化した講座などに出席し、TOEICについての知識を深めたいと考えている。

最後に、TTTに参加して筆者が感じたことを述べて本論を締めくくりたい。TTTの修了生のコメントの中で「人生が変わった」とコメントされた方がおられたが、筆者もそのように感じている。今回TTTで学習する機会を得て、筆者自身のTOEICについての知識不足を痛感した。そしてTOEICを知ることで、より深い指導につながることも実感した。また、英語教師とTOEIC指導者の意識の違いを明確に感じることができた。たった4日間の講座だが、TTTは単にスコアアップ指導のテクニックを学ぶ場ではなく、指導者としての意識改革の場としても大いに意義のある講座であると感じた。

前述したように、TOEIC L&R テスト高得点取得に必要な力は英語力、情報処理能力、TOEIC受験力である。この3つの力は、スポーツ同様、

バランスよく向上させる必要がある。これまで筆者は、学生に対して英語力向上を中心に教えてきてしまった。その結果は、ある程度の点数向上の後に見られるスコアの伸び悩みであった。今後は英語教師であるとともに TOEIC 指導者であることを意識し、学生に目標のスコアを与えるべく、指導法の研究と TOEIC そのものの研究を継続していきたい。

《注》

- 1 本論は、「TOEIC L&R テストにおける高得点取得者数向上を目指した英語教授法の研究」として「平成 29 年度湘北短期大学教育改革支援事業」に採択され、筆者が行った研究のうち、指導法に焦点を当てた報告である。
- 2 運営機関である国際ビジネスコミュニケーション協会では、一般的な Listening & Reading テストに加え、Speaking および Writing のテストも実施しておりこれらを総称して TOEIC® Tests としている。また初・中級者向けの TOEIC Bridge® Test と合わせて TOEIC® Program としている (IIBC ホームページ 参照 https://www.iibc-global.org/toeic/toeic_program.html)
- 3 IIBC ホームページ参照 https://www.iibc-global.org/toeic/toeic_program.html。
- 4 同上。
- 5 世界中の受験者約 700 万人の中で 60% 強が日本と韓国の受験者で占められているといわれている。その点に対する批判は猪浦道夫『TOEIC 亡国論』PP. 74-75 を参照されたい。
- 6 受験回数については地域によって異なる。例としてホームページに掲載されている第 235 回 (2018 年 11 月実施) から第 243 回 (2019 年 9 月) の受験地別テスト日程を見ると、東京・神奈川・千葉・埼玉は 9 回とも毎回開催だが、宇都宮・高崎・前橋は 7 回開催。小山・足利は 3 回開催される予定となっている。また、日本は最大でも 10 回の開催回数であるが、韓国では 20 回前後開催されている。また、IP TOEIC (団体受験) については特定の受験日を持たないので、各団体で受験日程を調整できる。日本と韓国は IP TOEIC L&R テストの受験者が非常に多いことも猪浦の批判に含まれている。
- 7 2019 年度からは前期に TOEIC 対策の授業が新設されることから、6 月の IP TOEIC L&R テストを 7 月に移行し、授業の成果を測定する予定。
- 8 猪浦, P. 41。
- 9 実際は小学校、中学校、高校、高専、短大、大学、大学院、語学学校、専門学校に分かれているが、比較対象としては 4 年制大学、短大、専門学校のみにする。
- 10 2017 年 4 月 1 日から 5 月 31 日までに IP テストを受験した新入社員が対象。
- 11 2017 年 4 月からの入社が内定した対象者の、2016 年 10 月 1 日から 12 月 31 日までのスコア平均。ただし受験者の学校種別は明記されていない。
- 12 なお、本学には学生が取得した資格のレベルに応じて奨学金を与える「資格取得奨励制度」が設けられており、TOEIC L&R テストについては 400 点、500 点、600 点、750 点というラインを設定し、それぞれのラインを超えた学生には、受験料相当、3 万円、5 万円、10 万円という奨学金が与えられる。
- 13 ゼミ生の人数も 4 名から 20 名と幅広いので、平均点にも大きな差異がみられる。
- 14 表 4 は、現在アルクホームページに掲載されている第 17 回 TTT の講座概要 (<https://teacher.alc.co.jp/all/training/ttt/>) を抜粋し、第 15 回の情報を書き加えたものである。
- 15 「意図問題」とは、ある表現を発話した (使用した) 意味を問う問題。2016 年の新形式から導入された以下のような設問。
例) What does the woman mean when she says, "Sounds nice" また、Part 5 の「読むことで解答につながる問題」とは語彙問題などのように、文章を読み文意を理解しないと正答を導き出せない問題。
- 16 <https://www.iibc-global.org/toeic/test/lr/guide04.html> 参照。
- 17 一般的に、プラスマイナス 30 点は誤差範囲とされている。また、同一受験者が英語力を維持した状態で複数回受験した場合でも、誤差範囲内でのスコアの増減がみられることは筆者自身確認している。
- 18 この点について、IIBC、ETS 共に公式発表はしていない。
- 19 IIBC ホームページ「テスト結果の見本」参照。
(<https://www.iibc-global.org/toeic/corpo/guide/toeic.html>)
- 20 IIBC ホームページ「公式認定証の形式」参照
(https://www.iibc-global.org/toeic/test/lr/guide04/guide04_02.html)
- 21 同上。

22 同上。

23 本学では6月最終土曜日にIP TOEIC L&R テストを実施しているため、その3週間前に入門講座として実施した。

《参考文献》

IIBC「TOEIC Program」ホームページ (https://www.iibc-global.org/toeic/toeic_program.html)

猪浦道夫『TOEIC 亡国論』（集英社、2018）

ヒロ前田『TOEIC L&R テスト至高の模試600問』（アルク、2017）

Teaching Strategies for TOEIC® Listening & Reading Test ～TOEIC® Teachers' Training～

Toshiyuki YAMAGATA

【abstract】

Acquiring a high score on the TOEIC® Listening & Reading Test requires special tactics improving English skills, information processing ability, and test taking ability. My class has put an emphasis on English skills for many years. However, some students could not reach their target score, which means my teaching method did not work sufficiently. In this paper, we will introduce new information on TOEIC teaching methodology we learned at TOEIC® Teachers' Training sessions. Also we will introduce some coaching Strategies which are useful for teaching.

【key words】

TOEIC, Teaching Methodology